



金子

KANEKO Mitsuharu 光晴

代表作

『赤土の家』(1919年)
『こがね蟲』(1923年)
『鯨』(1937年)
『落下傘』(1948年)
『蛾』(1948年)
『女たちへのエレジー』(1949年)
『人間の悲劇』(1952年)
『IL (イル)』(1965年)
『風流尸解記(フウリュウシカイキ)』
(1971年)
『どくろ杯』(1971年)
『ねむれ巴里』(1973年)

ほか多数

活動略歴

1895年 愛知県海東郡(現・津島市)に生まれる。
1897年 名古屋市小市場町(現・中区錦3丁目)へ
転居。建築業・清水組名古屋出張所主任の
金子莊太郎の養子となる。
1900年 養父の異動に伴い京都市に転居。6年後に
は東京へ転居。
早稲田大学入退学、東京美術学校入退学、
慶應義塾大学入退学。
1919年 『赤土の家』刊行。翌年欧州遊学にたつ。
1928年 妻・森美千代とともにアジア・欧州にたつ。
1935年 『文藝』に「鯨」を発表、2年後『鯨』刊行。
1948年 『落下傘』『蛾』刊行。
1954年 『人間の悲劇』で読売文学賞受賞、『どくろ杯』
『ねむれ巴里』等旅を綴る。
1972年 『風流尸解記』で芸術選奨文部大臣賞受賞。
若者の間で人気を博し、雑誌の編集長に。
1975年 没。

参考／『詩人／人間の悲劇 金子光晴自伝的作品集』
金子光晴・著、2023年(ちくま文庫・刊)

KANEKO Mitsuharu (1895– 1975/ Poets)

Born in Aichi Prefecture. After publishing his first collection of poems, "The House of Red Clay," in 1919, he traveled to Europe. In 1923, he received acclaim for "Golden Insects."

In 1928, he traveled to Asia and Europe with his wife, Mori Michiyo. He returned to Japan in 1932. He wrote many resistance poems, including "Shark" in 1937 and "Parachute" in 1948.

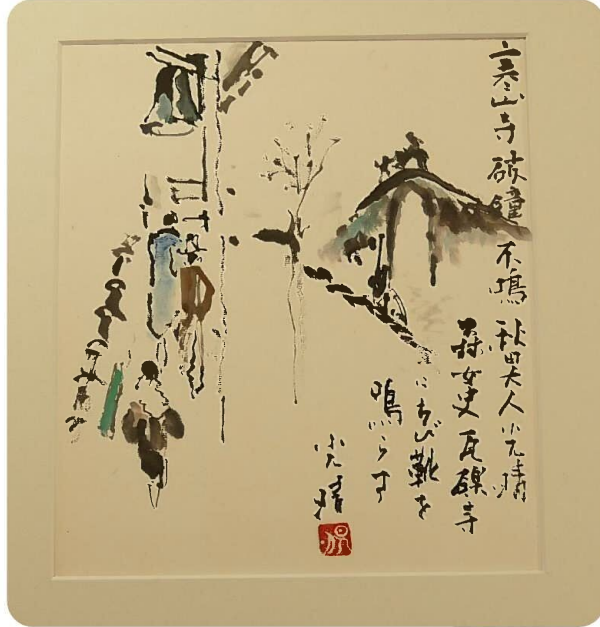
In 1953, he won the Yomiuri Prize for Literature for "Human Tragedy." His major works include the poetry collections "Moth," "Elegy for Women," and "IL," and the essays "Skull Cup" and "Sleep in Paris," among many others. He died in 1975.

ジャンル / 詩

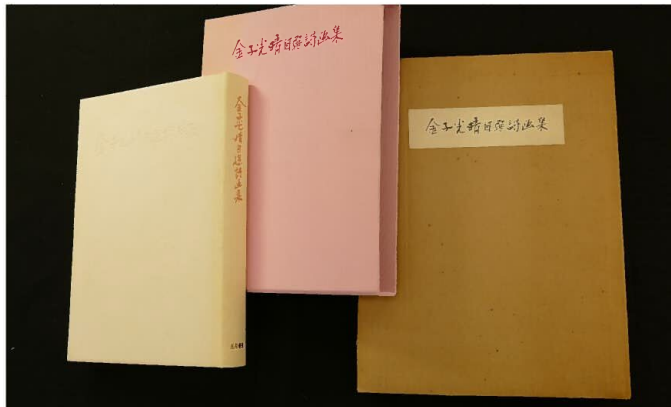
poets

名古屋市収蔵の資料
／金子光晴

(一部掲載；収蔵先 文化のみち二葉館)

Collection related to Kameyama Iwao in Nagoya City.
Storage location: Cultural Path Futaba Museum,
City of Nagoya.

←直筆の詩と画。裏面には特に文字無し。
 「寒山寺 破鐘くやれがね」不鳴くならず
 秋田大人くあきたたいじん> 光晴
 森女史 瓦礫寺くがれきじ>
 に ちび靴をならず
 光晴 落款 (落款確認済)



↑「金子光晴自選詩画集」1974年・五月書房刊。
 限定200部で刊行された。数冊調査したところ
 直筆氏名は入っている状態で販売されていた。



↑「定本 金子光晴全詩集」筑摩書房刊
 ・502番/1,500部限定1967年刊。当時販
 売価格5,800円。

上記資料の閲覧を希望される方は、[文化芸術推進課](#)または[文化のみち二葉館](#)までお問い合わせください。
 なお、学術研究または教育普及目的の場合にのみ閲覧が可能で、所定の手続きが必要です。